

山の辺文化講座 「内山永久寺と修験道」

令和5年(2023)10月7日
天理市教育委員会 文化財課 森本雅崇

1. 内山永久寺の創建

内山永久寺は、永久2年(1114)に鳥羽天皇の勅命によって創建された、興福寺大乘院法務大僧正尋範とその師頼実を本願とする興福寺大乘院の末寺である。中世後期においては、大乘院門跡経尋によって「大寺也」と評されるほどの寺院であった。経尋が記した『経尋記』の大永3年(1523)2月11日の記録には、永久寺内の「山伏方」の存在が記されており、寺内の山伏集団の存在が広く寺外に認められていたことがうかがえる。

・中世の寺院における身分的階層(これは永久寺に限った話ではない):上から順に、貴種・良家・学侶・堂衆・堂衆の下にある「下部」
「下僧」と称される下級僧侶

学侶と堂衆の違い:灌頂の有無→灌頂(密教において阿闍梨から法門を伝授されるときに行うもので、種々の戒律や資格を授けて正当な継承者とするための儀式)を受けることのできる学侶以上の階層と異なり、堂衆以下の僧侶は寺が伝える正当な密教を習得・継承することができなかった

堂衆（行人・禅衆・夏衆といった呼称もある）は修験道の主要な担い手となり、斗藪（とそう）と呼ばれる修行、つまりは山岳での修行によって験力を身に付けることで堂衆の集団としての結束を強めようとした→寺院社会の本流にはおかれなかった修験者が人々の帰依を受け、その活動を展開（→学侶集団への対抗）

・修験道本山派と「当山」方

聖護院門跡を棟梁とする本山派⇔醍醐寺三宝院門跡を棟梁とする当山派が互いに牽制しあう関係である、という理解がなされてきた→こうした二項対立的な見方で本当に正しいと言えるのか？→これは史料が豊富な近世以降の修験道の実態を表したもので、中世における修験道の史料は少なくその実態を解明するのは困難

醍醐寺の史料を主に用いた、中世の当山派の実態に関する関口真規子氏の研究（関口 2009）→和歌森太郎氏、宮家準氏、長谷川賢二氏、鈴木昭英氏、徳永誓子氏らの研究を発展させ、修験道研究を大きく前進させた

近世に入り、当山派は醍醐寺三宝院門跡を棟梁としたが、慶長 18 年（1613）の修験道法度において、聖護院門跡を棟梁とする本山派とともに全国の修験者を統括する事実上の公認を受けた→これを境

として当山派を区別し、中世においては未だ教団としてのまとまりは強くはなかったと推測されるため、「当山」方と呼ぶことを提唱した（関口 2009）→本資料中でも「当山」方と表記することとする。

「当山」方を運営する主体であったのは先達衆と呼ばれる集団→大和国を中心とする畿内の寺院に所属する修験者（松尾寺や矢田寺などの山岳寺院が多く、内山永久寺も含まれる）

「三十六正大先達」「当山先達衆中」「諸先達」「当山諸先達中」など複数の呼称があり、構成する先達衆寺院の数も一定ではなかった→中世においては、柔軟かつ流動的な組織体制であったと考えられる

2. 上醍醐寺御影堂修造と永久寺先達

・「当山」方と醍醐寺が関係を結んだ端緒として、両者の聖宝信仰に基づいた上醍醐寺御影堂修造への奉加が挙げられる

・御影堂は 13 世紀に聖宝追善のための堅義論義執行にふさわしい形式に再建されたもので、開山者聖宝に対する寺僧の畏敬の念を象徴した堂舎であった→中世後期、応仁の乱等の度重なる戦乱などで混乱していた社会状況から、醍醐寺伽藍は荒廃し寺院経済も疲弊、御影堂も荒廃→こうした中、聖宝の跡を慕う寺僧が御影堂修造を強く望

んだのは当然のこと

・「当山」方にとって御影堂修造への奉加は、教団内には流祖聖宝を仰ぐ自然の根源を再確認する手段、そして教団外には独立した教団としての「当山」方の存在と隆盛を証明するという利益をもたらすもの→御影堂修造への奉加という行為自体が、「当山」方の独自性と結束を強めるものであり、教団存続を図るために不可欠な行動→伽藍復興を望む上醍醐寺側との利害の一致

御影堂修造をめぐる上醍醐寺と「当山」方との関係において、永久寺先達が伝達役として重要な役割を果たした→永久寺先達が「当山」方を運営していた先達（大宿を筆頭とする役職者）よりも先に上醍醐寺と接触し、奉加の相談を行う

奉加を求める書状も、上醍醐寺から永久寺先達に対して出されている→上醍醐寺からの期待、永久寺先達を頼りにし重用した

3. 内山永久寺と「当山」派棟梁

・「当山」方先達衆の序列を構成する要素は、修験者としての年功である入峰度数である（入峰：吉野・熊野・大峰をはじめとする山々での山岳修行。縦走のための道として大峰奥駈道が開かれた）

・永久寺は興福寺大乘院末寺の中でも祈祷の権仕を重要な役割とし

ており、山務職を担う上乘院も様々な祈禱を勤めた→上乘院の僧が
験力を身に付けるために入峰に励むことも十分に想定される

- ・ 上乘院の入峰の行程→七月初旬に吉野から大峯へ入り、八月中旬
に熊野へ出る

- ・ 上乘院の入峰に金銭の助成があったことが記録に残されている→
史料のタイトルが「御入峯助成日記」（史料 1）であり「御」の字が
入っていることから、「当山」方から見て上位の存在による入峰と分
かる

- ・ また、入峰を遂げた上乘院は「御門跡」として先達衆とは別格であ
るとみなされ、「当山」方から仰がれる地位にあった→金銭の助成を
行ったのは畿内の多くの山岳寺院、高野山・信貴山・吉野山など（天
理では釜口山長岳寺が含まれている）

- ・ 金銭の助成を行った諸寺と、史料 2 に挙げた「花供逆峯諸下行目
録」に記載された天文 23 年（1554）の「当山」方諸先達を比較する
と、ほとんどが重複していることが分かる→助成を行ったのは「当山」
方諸先達の積極的な意志によるものであることが裏付けられる

- ・ 上乘院は「当山」方棟梁とみなされるに足る存在であったが、聖護
院門跡から及ぼされる影響力を防ぐことができなかった→三宝院門

跡の義演が、三宝院門跡を本寺とする関東の真言宗諸寺院に対する影響力の強化（役銭の納付を命じるなど）に反発→それに目をつけた「当山」方先達衆は三宝院門跡を棟梁に据えようと画策し、義演に進言して認められ、正式に三宝院門跡の傘下となる

・つまり、「当山」方先達衆は自らを庇護し得るだけの棟梁を必要とし、その結果三宝院門跡を棟梁として仰ぐこととなった、という流れ

4. おわりに

修験道教団の一つである「当山」方は、先達衆による自治体制によって運営される教団であったが、中世後期に入ると聖護院門跡からの影響が及ぶようになる。ここで「当山」方は、上醍醐寺の御影堂修造への奉加を行うことで、聖宝を流祖と仰ぐ「当山」方としてその独自性を強めようとした。そこで上醍醐寺と「当山」方先達衆との間に立ち、「当山」方の運営に重要な役割を果たしたのが永久寺先達であった。

永久寺先達は、永久寺山務の立場にあった上乘院の入峰実現に尽力し、上乘院を「当山」方の棟梁とする役割を果たした。しかし、上乘院の存在をもってしても、聖護院門跡の影響力を排除することはできなかった。このため先達衆は自らを庇護する、より強い権威を求

めて新たな棟梁を模索した結果、棟梁は醍醐寺の三宝院門跡へと移ることとなり、以後当山派と上乘院との関係は希薄となった。

以上のような経緯で、修験道教団当山派の基礎が形作られたが、永久寺先達はこの過程の中で教団運営の転機に大きく関わり、これを牽引する役割を担った。

明治の神仏分離令によって修験道が禁止され、続く廃仏毀釈で永久寺が致命的な打撃を受けたことも事実であるが、近世の段階から永久寺の衰退が始まっていた可能性も指摘されており、それは「当山」方棟梁の交代により、修験道と永久寺の関係性が希薄となっていったことも要因の一つとしてあったのではないかと推測される。

【参考文献】

鈴木昭英 2003『修験教団の成立と展開』法蔵館

関口真規子 2009『修験道教団成立史』勉誠出版

徳永誓子 1998「修験道当山派と興福寺堂衆」『日本史研究』435

吉井敏幸 2014「内山永久寺について」天理市文化財課平成 26 年夏の文化財展講演レジュメ

山の辺文化講座 「内山永久寺と修験道」

令和5年(2023)10月7日
天理市教育委員会 文化財課 森本雅崇

史料1 天文十八年

上乘院入峯助成日記

安部山

吉野山

ミワ(三輪)

海住山

カマノクチ(釜口山長岳寺)

ヲタワラ(小田原浄瑠璃寺)

高蔵飯道寺岩本

多武峰

信貴山

法隆寺

根来寺西

根来寺東

粉河中河

ナラ絵師助

和田

菩提山宝光院

菩提山大坊

飯道寺梅本

当尾寺

伏見

史料2 天文廿三年 花供逆峯

下行目録

フシミ(伏見寺)

ホウリウシ(法隆寺)

ヨシノ(吉野山桜本坊)

セキテラ(世義寺)

ミワ(三輪山平等寺)

カマノクチ(釜口山長岳寺)

ウチヤマ(内山永久寺)

リヤウセンシ(靈山寺)

タンシヤウシ(丹生寺)

チウセンシ(超昇寺)

アヘ(安倍寺)

マキノヲ(槇尾山施福寺)

ニシ(根来寺西)

ヰワモト(飯道寺岩本坊)

タカマ(高天寺)

下坊

カウヤ(高野山)

ミキタ(和田寺)

ナル川(鳴川千光寺)

ムメモト(飯道寺梅本坊)

カウノヲ(神於寺)

ヒカシ(根来寺東)

ヤタ(矢田寺)

タフノミ子(多武峰寺)

シキ(信貴山朝護孫子寺)

タカクラ(高倉寺)

コカワ(粉河寺)

ナカノ川(中川成身院)

大坊(菩提山正曆寺大坊)